

本朝鍛冶考

寛政七年 鎌田三郎太夫著

備後国

当国は三原正家の初代と正廣と二人をさして古三原と称

す一門数十人 正家は備州三原住と切(り)たる吉 備後国三原住と

切(り)たるも有申(す)也 末の正家は又劣れり 初代正家の出来は粟

田口物の風情有(り)て 艶照鉞子の位劣れり 鍛ひ鉞元板目

中程より上は杵目にて肌細り也 地青く匂ひ深し ぼうし

丸く峯方へ寄りて帰る也 中心の形備前物より末細く

小肉峯粟尻也 正廣備州三原住と切 一乗三原の類

盛家兼清兼行兼安一門又廣し 法華一乗と号し

多宝の梵字と南無妙法蓮華経と切(り)たるを銘と為 出来の

風情正家の浅き物にて大(い)に替る事なし 増守は世より

木梨と号し同国鞆と尾道に住するもの数十人也 貞国貞家

宗貞は鞆 末には貝三原鞆三原辰房三原と号する みな

正家より出たり 数百人其出来極(め)て演(べ)がたし 貞廣等

の上手は数人有撰(び)て佩刀と為べき者辰房一門殊に多し

平成二十四年(二〇二二年)八月一日

其阿彌秀文 編集